五月興行

文楽座人形淨瑠璃

ひるの部

一部金十五錢

文楽座

しばつ四

御挨拶

青葉輝くはつなつ五月、皆々様には、いよいよ御機嫌よろしきことゝ、存じ上げます。

事新らしく、申す迄もなく、皆々様は、御熟知のこと〻存じ上げますが、吾國に、數ある郷土藝術の中、最、藝術化した文樂座、淨瑠璃人形芝居こそ、粹中の粹として、興行毎に、皆々様から、御絶讃を頂き居りますが、「文樂を保護せよ」との聲は、朝野に喧しく今や「文樂協會」も、設立される運びとなりました、當皐月興行も、引き續き、晝夜二部制興行と致しまして目新らしき名狂言を、晝の部は、古靱太夫、友次郎に、錣太夫、新左衛門、人形には榮三、文五郎、他若手花形を揃へて華々しく御尊覽に供する事に致しました。はつ夏五月を迎へて、三味一體の此藝術をお味ひ下さいませ。

昭和八年五月一日初日

晝の部　午後一時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席御一名　金二圓
二等席御一名　金八十錢
三等席御一名　金四十錢

一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符専用電話　南四七一一番
電話　南七四〇八番　三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

長三四九四　三〇八四
四四九四　一〇四四

土佐堀(44)

人形淨瑠璃

毎日午後一時開演

文楽座

書の部

三味線

千秋萬歳

大夫 太郎 太郎 次郎

新緑五月に香り高き鄕土藝術

文樂座人形淨瑠璃

五月興行晝夜二部制

晝の部豫定時間表

薫樹累物語

垣生村の段（午後一時より二時まで）

土橋の段（二時五分より二時五十分まで）

幕間　十分間

岸姫松轡鑑

飯原兵衛屋敷の段

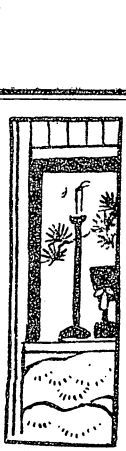
（三時より四時三十分まで）

幕間　十分間

戻駕色相肩

廓噺の段（四時四十分より五時十分まで）

（舞臺裝置　大塚克三）



埴生村の段

中　豊竹和泉太夫
鶴澤友平
鶴澤綱右衛門
切　竹本錣太夫
豊澤新左衛門

人形

百姓　與右衛門　吉田榮三
女房　累　吉田文五郎
金五郎　吉田玉幸
亭主　才兵衛　吉田玉徳
村ノあるき　吉田兵次
茱萸　吉田傳之助
茱萸嬶　吉田玉昇

第一　薫樹累物語

埴生村より　土橋まで

この淨瑠璃は安永八年櫻田治助作の「伊達競阿國戲場」に始まり寛政二年四月「薫樹累物語」と名題上場伊達騷動に舞臺を置いたかされ與右衛門の物語りで今度は埴生村から土橋まで上場致します、内容は賴兼公は傾城高尾に魂を奪はれ藩政を顧みずために奸臣の乘ずるところとなりお家騷動が起る、賴兼に恩顧をうけた角力取の絹川谷藏はお主のために高尾を殺害する谷藏は不思議な縁で豆腐屋三婦といふ高尾の兄の家にかくまはれその妹の累に見染められ夫婦になる、高尾の亡魂が現はれて累を恨み祟りで累の顔形が醜くなる、埴生村の與右衛門とは絹川谷藏が世を忍ぶ假の名で累もよく貞節をつくしたが奸臣の手先となつて賴兼公の御臺歌潟姫を拐かした無賴漢金五郎は散々に姫と累をなやます、累は顔形の醜さも知らず身體までして夫の忠義を助けやうとしたのに悋氣の形相物凄く絹川堤に追ひかけて歌潟姫を鎌で殺す、與右衛門はこれを見て涙を呑んでお主の爲に累を殺すといふ陰慘な内に葬々と迫る情痴の世界が展開されます。

（床本）埴生村の段（中）

小雨いさはず戀する妹が、誰を待つ身か、しよぼ〳〵濡れて濡は戀路

のよい辻占よ諷ひうたふは下總の、所は名さへ埴生村、荒れし住居に、荒くれし、相撲取の絹川が累を連れて古里へ浮世を暫し忍ぶ名も、百姓の與右衛門と替りし業も習ふより馴ぬ累も夫思ひ、身に苅豆を脊に負ひ畑から歸る女夫連、詞與之吉樣、お駒さんよふ手傳て下さんしたのふ。わしらは仕末ぬ事故に、お前方に振向けて、苅て貰ふた苅豆。内迄運ぶが、二人の仕事マア〳〵休んで下さんせヤ 詞ホンニ二人ながらいかい大儀で有たの、ソレ累。茶でもわかして呑ましやいの。イヤモ其樣に構ふて下さんすな〳〵。わしらもいんで休まふ。と打連てこそ立歸る。後にくわつと燃る火の累が胸のさけしなく夫の傍へ差寄て、詞コレこちの人。ホンニ〳〵こな樣は〳〵。モ餘りな悪性じやぞへ、お前、歸りがけ與之吉が云たのは、ほんの事でござんすかへ。モ今更いふではなけれども、二人が中は兄樣の情で結ぶ縁の糸、といてお前が餘所外に仇し心が出來たらば、わしや何とせふ。どふせふぞ。アレ見やしやんせ、木々でさへ女夫の樣に思はるゝ男の松を力にて付纏ひ藤かづら、細き女の心では過しがするはいな。と目には涙をまたもちぼうかとこぼす露しづく。詞エ〜我身もマア何の事じやぞいの、最前與之吉の言つたのは、アリヤない事ぢや。アー〳〵。イエ〳〵ない事じやござんすまい。モ斯云へばわしが口から器量自慢をする樣なれど、京に生れて世の人に袖つま引れ近所でもアレアノ豆腐屋の娘は半四郎に似て有る、とんと生寫しじやのと。噂しられた此わしが。在所生れのおそよとやらに見かへられては、エー立ませぬ。と悋氣の中へ取交た器量自慢も、いつしかに姉が死靈に面ざしの替りし事はいざ知らぬ心の内の不便や。と思ふ思ひを覺られじ。と詞ハテ扨何をやくたいもない事をいやるぞいの。モそなたの樣な美しい女房持て居て、此田舍の土だらけなソシテアノ日なたくさい女に目もやる物かいの、内を出る時門口で轉んで足こそちんばなれ、顔形なら風俗なら、江戸の吉原へ突出しにしても二人と下る器量じやないわいの、モほんに〳〵わしが樣な女房果報の有者はない。たとへ又、天女が天下

り情所を見せかけても七里けんばいマ氣は移らぬ。ヤコレ氣遣ひのきのに長點かけたりこちの辨天、船まんぢうの取梶も今宵の風まん取かけるぞ船玉清めて、コレ待給へと云ふにつこり折易き、女心の一筋に、そふ思ふて下さんすかや、わしや嬉しい。と寄添てまたうら若き女夫中世帶馴ぬも戀ならん。折から來たるは此村で、立られもせず横道な事を身過に、ぶら〳〵と、懷手して門口から。コリヤ〳〵〳〵書中に痴話るな〳〵。アコリヤ見とむない置てくれ〳〵。何を金五郎のじやら〳〵と悪口を云やるぞいの。そしてマア我身は何と思ふて、アイヤ何とは、ちつとおれが金儲けの事に付て、そなたに問たい事があつて來たがマア口祝にコレ何と一杯へゝ呑して下んせぬかい。チ〜心安い事なれど折節取た酒はなし、チ一走り行て買て來やんしよ。チ女房共、そんなら一寸行て買ておじや。と投出す腰のはした錢、短きお足いとひなく小褄引上げ、酒德利提てとついかしなる成る酒屋をさして急ぎ行く、後は互に差向ひ、膝摺寄せてイヤナニ與右衛門外に誰も聞き人はなし、貴樣にちつと尋れたい事が有ると云ば外の事でもない、此四五年以前在所を出て、上方で相撲をして居やつたと云噂、村内に居やる時分から小達者には取り何でもマアよい事じやといふて居たが其時の我身の名乘は何と云た。エサそれ聞たいと只何となくやはらかにうら問かける。心に一物アハ〳〵何の事かと思ふたら仰山な物の問ひ樣、成程吾が身の云やる通り上方へ登つてから相撲部室に這入つては居たが、イヤモ人に知らるゝ程な事ではないわいの、アゝ其時のわしも名は絹川やイヤサ絹川の谷藏と云ふがのと、云はれて胸にぎつくりと當れど程もそらさぬ顏、ム何のいの詞伊達殿や稻川殿の樣な關取なら、所の名も付もせふが、ヤモ我名さへろく〳〵に忘れる樣なはたした相撲所の名折へゝ何のマアと輪に吹て居る煙草の煙　詞フゝ名乘れまい、ヤ云れぬ筈じやて。其絹川と云やつは、一人ならず三人四人の人を殺しぐれが廻つて身の置所がなさに、上方から、うろ〳〵と。此處らあたり逃てうせたげな。アゝ命と云ふ物は

惜い物じやそふな。弱いやつ、アヽ未練なやつの。アハヽヽが今にでもおれが手先へ廻るが最後の助。お尋者の絹川。引くゝつて褒美にする。ノフヘヽヘヽそんな物ぢやないか、與右衛門。と知て云のか知らぬのかとほりかれたる烟管の紙縒。詞ムヽ成程つい聞た時には、其絹川。卑怯者とも思はるれど、通なる男じやハテ、なぜと云や、三人四人の人をあやめる大丈太それ程の魂で、何の逃隠れしてたまる物かいの、定めて夫は大切な御主の爲、と云様な事でかな有らふ。マアそんな物があるまいかい。ムウムヽヽいか様。そふ云へば、そんな物かい。そんならそれはマアそれよサテ變つた事もあるものぢや。マヽ聞てたも昨日絹川の堤で、年の頃は十六七でもあらうか、尋常なうづ高い娘が。絹川を教へてくれ、と云ふによつて、絹川と云は此川ぢや、といふたれば。イヤ川の事ぢやない絹川と云相撲取をたづれる者、伴をして來た者あれど。昨日とやら道ではぐれ、所は知らず。絹川〳〵とあつちこつちで尋ね。やう〳〵爰迄來た。どふぞ絹川に會してくれ、と、わしを佛の様に手を合して泣ての頼み。つまはづれと云ふ詞付。何でも都北白川、父は吉田の何某と、梅若くさい生れ付。そこでおれが思ふにば。やこいつはよい代物が手に入つた、江戸の吉原に賣つてやつたら百兩には捨ても成と、昨日の晩からこちの内にしつかりと、圍うて置た。幸、吉原の花扇屋の亭主。筑波參りの戻りがけ此在所に逗留して居る。一寸其事話したら見ぬ先から飛付て百兩には値が成た。が、わが身が其絹川なら。渡してやる。只も有ふが絹川でもない人に。ネツカラモ渡すと云程の様な事でもないと云物ぢやてのふ、プハヽヽイヤモ何じや知らぬが此間はモ。金儲けが降る様なと話す度々與右衛門が惚りし姫の身の上。それこそは御主人と云へば我身の一大事、兎やせん、角やと。胸の中。千々に碎る思ひ也。思案を極めさあらぬ体、詞ハテ扨そなたは、よい金の絃に取付やつたのふ。が、今のそなたの話。餘程よい代物の様に思はる。金五郎、ヘヽ笑ふて給な見ぬ戀にあこがれた。物は談合じやが。何と俺が女房にたもらぬか。ア

ノ累ど云ふ女房のある上。ハテ扨わが身も醉の樣にもない。よふ思ふても見や。あた外聞の悪い鯰に當身くらはした樣な面。へゝ、いつ迄女房に持て居らるゝ物で。ムゝスリヤアノ、眞實女房に、何の嘘を云物で。ハテあぢいにきいろにうこん色にからみかけるのか。アハゝゝゝヤ面白い、女房にやろ。がやるはやるが、與右衛門。サ金せふかい。アイヤ其金は。ないか、あるまい〳〵。ヤ何のあらふぞい。我身達の齒にはちつと合ひにくい。あかん事ぢやよしにしや〳〵。ドリヤ花扇屋の亭主に引合せ。久し振で百兩の。へゝ金の面を拜まふかい。と立上る袖引止め。金五郎。渡そ。ヤ、が今はない。あつちこつちにあづけてをいた金。それ集めるに間があらう。今夜の九ツ迄待つてたも、夜半の鐘を合圖に。百兩の金渡そ。ハテ、それ程に云ふことなら、友達のよしみ夜半までは待てやらふ。が必約束違へぬ樣。併し累が手前もある。爰の内へ其幻妻連てくるは。へゝおれも氣の毒。ヤこふせふかい。絹川の土橋迄、金揃へて持ておじや、チゝそれではおれも勝手がよい。出會所は土橋の際。金と代物引換に。必何處へも。チゝ合點じやと、欲の熊鷹、兩の手に。握つた思案を心に納め。へゝハゝ〳〵〳〵プハゝゝ。一人笑して。〳〵出て行く。

（床本）　垣生村の段（切）

さして立歸る後は思ひに花ぞちる、物思へとや入相の鐘にせかるゝ百兩の才覺何と與右衛門が思案に胸の暮近く思ひ廻せばまはす程御屋形の騷動故一旦この絹川が御供して立退しと風聞せし賴兼公、都の内におはす共辨へなき姫君樣、女心にはる〳〵としたふてお出遊ばしたが何にもせよちよつとマアお目にかゝつてアイヤ〳〵邪にいがんだ鉦八め絹川とし られては我身の大事姫君の御身の上にかゝる難儀と有て百兩の金はなし所詮手短かに鉦八めを追かけて打放し姫君の御供して立退より外はなしチゝそふじや〳〵、さかけ出すをまとひ付前垂の紐恩愛の緣に引かるゝ後髮此儘に立ちのかば嘸やあとにて女房が何にもしらず見捨たかと恨むで有ふ泣で有兄の戸平に詞をつがひ、

たとへどの樣な事有つても一生見捨まいといふた女房義理のかけるもお主の爲了簡して下され戸平殿、こらへてくれ女房共せめて一筆殘さんと搜す硯の石の海、浮世に秋の日の脚も片足短き女房の累はとつかば酒屋から歸る我家の黃昏時、はつと驚き懷ろへ隱すあいろも夕まぐれ、チヽ嘸待ち兼さしやんせふ此在所の酒はわるいといはしやんすによつて隣村まで行て買て來やんしたそれはマアそふと鉦八樣は何處にじやえ、イヤモ待かれてとふにいんで仕まふたエヽモほんに氣の短いお人ではあるぞ折角買て戻つた酒、そんならお前呑しやんせアヽいや〳〵おれはもふ酒所ではないはいのと何處やら濟ぬ夫の顏つい目に付もほれた中心にかゝる傍へ寄コレこちの人いかふ顏の色もわるしお前は何とぞさしやんしたかそふしてマアついにない日頃の好きの酒もいや、ムヽ何ぞこりやこなさん樣子のある事でござんすの、女房のわしに隱さずとちよつと聞して下さんせと聞きたがるのも夫思ふ心づかひぞ道理なる不便とは思へ共もれては事の妨げとそれとは言はでコレ累今までそなたに言はなんだが何を隱そふアノ鉦八には親の代から百兩と言ふ借がある此中から其金を戻せ〳〵といらだての催促いろ〳〵と言延ばしたがせつば詰つて今夜の夜半ごふ有ても其金立ればならぬ事になり受合事は請合ふたが土か砂か見る樣に百兩といふ大まいの金早速とヽなふ當もなし、いつそ毒くはゞ皿アノ鉦八めをきり殺しエヽサコリヤサそふも思ふて見たが又外に工面の仕樣も有らふかと今其思案最中と語る夫の今の間に降つて湧いたる身の難儀妻も途方にくれは鳥。只涙ぐみ居たりしが日頃夫のつきつめし、心をそれとくみ取てエヽやくたいもない與右衛門殿何のマア百兩やそこらの金其樣に苦にさしやんす事はないはいな、またよい思案もござんせふコレ短氣をめて下さんせへお前の其短氣故、人をあやめてコリヤサアもし其事が現はれてどんな憂目にあはしやんせふかとほんに夜の目も合はぬはいな今此日影の身となつたも皆こな樣の心からもしもの事が有たらばあとに殘つたわしが身はどのやうに有ふぞとちつとは又女房の心推量

してくれたがよいと夫思ひの一筋に聲も得上げぬ忍び泣夫も不便の涙を隱し、それほどにまでおれが事思ふてたもる志、惡ふはうけぬ嬉しいぞやコレおりやモ何もかもよふ得心して居る、ムゝそんならば何事も聞き譯て下さんしたか、エゝ嬉しうござんす、九つまではまだ間もあり一寸延れば尋延る、マア〳〵奥へござんして酒でも一つ呑しやんせ、又よい思案も出よぞいなと奥へすゝめる女房の親見るにほろりと落方の涙を胸に與右衛門はしほ〳〵と立て入る後へ所見馴ぬ一腰も派手な合羽の取りなりは遠それ屋と門口からちつとお賴み申ませふ、與右衛門樣とはこなたでござりますか鉦八樣といふお方がお前樣にと承はりましたがちよつとお目にかゝりたふござりますといへどこなたは耳にも入らず通つて下さんせエゝ何じややら邪魔らしい奉加所かいな、私が所は宗旨が違ひますと胸のもや〳〵あいそなきイヤ左樣な者ではござりませぬ私は江戸吉原の女郎屋でござりまするが鉦八樣に御相談仕かけました奉公人金持て來いこなた樣に待て居るとおつしやりましたが、ハテ、めんよふなどつちへお出なされました、ごふぞお目にかゝりたいものじやがと、いふ中ふつと氣の付つ累我身を賣つて百兩の金調へる手寄には、是幸ひと笑顔してごふで見へる鉦八樣這入つてお待なされませハイ〳〵左樣ならばお邪魔ながらヤ御免なされませとしらぬ人にも取入るは商賣筋の上手者、累ば傍へ煙草盆、いひ寄るしほに茶を差出しイヤ申しおまへはアノ吉原の女郎屋さんでござんすかそんならお前に折入つてお賴み申したい事がござんすといふは外の事でもない夫が手詰めの難儀につき急に金の入る事が有て身を賣りたいといふ人がござんすが今いふて今相談が出來る物でござんすかいなイヤもふそれは商賣づくいつでも談合出來まするそしてまあ其本人の年頃は、アイ十七八でござんするヨシ顔のすまい、立て入れの樣子サア顔形風俗は大阪でいふて見よふならば歌舞伎芝居の野盧によふ似てござんすといな、それはきやうとい代物じやどふぞわしが方へ相談を極めませふ、そして金の望はマア百兩にさへ買て下さんす

りや年は五年が十年でもそれにいとひはござんせぬヤモ今の咄しの通りなら隨分百兩に買ませふ、幸ひ金は持て居る相談さへ極つたら直ぐにつれていにたいものそんならそふして下さんせ、シタが今いふ通り夫のある身互ひに得心づくの上暇乞する其あいだアレあの納戸で暫しも中そんなら必ず何もかもコレ手廻し早ふ賴みますといそ〳〵として彼男納戸へこそは入にけり、累はあとを見送つて手詰めの金の今の間につい調ふて嬉しやと思へば悲しき愛別れアゝ是とても男の爲とてもの事に潔ふ夫に泣顏見せぬのが別るゝ此身の置土産と氣を取り直す一間より何心なく出る與右衛門、顏を見る目もふさがる思ひ、押隱して傍へ寄、イヤ申しこちの人、わたしやお前に願ひがある、聞き屆けて下さんすが是は又改まつて女房共願ひとはそりや何事サア日頃お前の言はしやんすには鏡をみると添ふては居ぬ、隙をやると言はしやんした其鏡が見たふござんすヤ何といやるそんならそなたは隙くれといやるのかアイ今宵にせまつた手詰の金、勤めにやつて下さんせと我形のかはりしとはしらぬ不便さいぢらしさ何のマア其顏でといふも言はれぬ苦しさの胸に涙を呑込ながらエゝ埒もない、たとへどの樣な事が有てもそなたに勤奉公さして兄の戸平へ立ものか、サイナ、それじやよつて暇の狀隙くださんせ與右衛門殿とはいふものゝ中に女房は夫に去れまい、隙とるまいとする筈を、緣切られても嬉しいと思ふ心を推量して可愛と思ふて下さんせと思はずわつと聲立て取付縋る蔦の葉の袖に柵む憂き涙、さめかれたるばかりなりほんに私とした事がよふ得心して居ながら、どふろたへて泣たやら、年の立つ間は射る矢より早ふ罵つて元の女夫必々それまでは健でくらして下さんせとつらい苦界へ身を賣るより昔にかはる面さし共、何にもしらぬ心根が其百倍のいぢらしさ、五体をしめ木にしめ付られ油ぬかるゝ憂涙さゞめかれたる折からにいきせきさくる村の歩行申し〳〵與右衛門樣山名宗全樣から繪姿樣を以てお尋れなさるゝ者がある、今ござりませとお代官の言付け、サア〳〵今じや〳〵とせり立つればはつことばかりに

興右衛門が重なる思ひは今を的、胸をすへたる魂の一腰ぼつこみ立れば、コレ待しやんせ、興右衛門殿さつきにお前にいふ通り短氣を出して下さんすなといふ間もせはしくサア申し、早ふ〳〵とせつかれて代官所へと出て行く、後かげさへ名殘りかと見やる目にわく雨なみだ、しほ〳〵立て押入の冬の支度の綿入も漸く裾をあはせ物、はなれものとはいひながら、かれてかくなる身としらばせめて不自由のなき樣にせんだくものゝ糊立も涙にしめる糸筋や、針のみゝずの見へわかぬあくびまぜくり納戸より立出る以前の男、アヽ旅草臥で思はずしらず〳〵とやつて退けた、サア申しお内儀樣御暇乞も濟だならおり極めしましよかい、チヽ嘸お待遠にござんせふ、サアそんなら其百兩の金渡して下さんせ、チヽそりや何時でも渡しませふがシテマア其奉公人はアイわたしが事でござんすはいなエヽ何をじやら〳〵と、サア〳〵氣がせきます早ふ賴みますイヤ申しじやら〳〵ではござんせぬ眞實誓文わたしが身を賣るのでござんすはいな、エヽこなさんは〳〵そりやマア何をいふのじやぞいのソレさつきに言はんした野鹽とやらいふ代物、サイナアわたしが事でござんすわいなヤア此人は氣が違ふたそふな、ムヽそんならこな樣が野鹽か、こいつはごま鹽が聞てあきれるはいこれいのふこな樣を誰がマア惣嫁にもほしがる者はないぞや、アヽそれやマア何で其樣に何で其樣にもあつかましは、餘りあきれてものが言はれぬはいの、ハア貴樣こりや鏡見たこと樣子がござんして鏡見る事はならぬはいなムヽいかさまそふで有ろ〳〵生れてから鏡見た事はあるまい、コレこなたの顏の容体はいふて聞かそか、ぐるり高のちよつぼり鼻顏にべつたり瘟かあつてしかも出齒で横から禿が見へて其かはりにちんばときてゐる、エヽヤエヽもすさましはいの、幸ひこゝに髭ぬき鏡けうけゞんな御面相、とつくりと見やしやれと、懷ろより取出しやら腹立ちにさし付くれば思はず初めて見る顏にはつと惚りまだ外に人も居るやと見廻はせば我ならずして面影はよもやと又も取上て見れば見る程情けなやコハそもいかに悲

しやとあなたへうろ〳〵こなたへ走り狂氣のごとく身をもだへ鏡をばつしと打付けて我身をどうどうち倒れ聲をはかりの叫び泣哀れにも又いぢらしき、エ〜いま〳〵しい隙づいやし、イヤモ此樣な化物を百兩は扨置て米一升でも買人はないとつぶやき〳〵立上り、せめてお脚で腹いよと泣入り累を踏飛し足を早めて立歸るあとは正体泣くづむれ顔も得上げず居たりしがア〜思へば〳〵恥かしや斯いふわしが顔故に鏡を見せぬ夫の心其顔もせず朝夕に可愛がつて下さんしたお情け過ぎて情けなや、やぜ打明けてありやうにいふて聞かせて下さんせぬ、又姉樣もどうよくな現在の妹を是程までに憎ひかへ斯いふ事共つゆしらず今の今までわしが身で器量自慢をして居たがばづかしいやらエ〜つゝともう悲しいやら、何面目に與右衛門殿どふマア顔が合はされふ、せめて夫と同じ名の絹川へ身をなげて死るは未來で連添ふ心とは言ひながら、さつぱりと、思ひ切られぬほれた中、死だあとでは美しい女中を女房に持しやんしよとそればつかりが氣にかゝり是が迷ひのたれとなり、よふ浮まぬでござんせふ、可愛と思ふて折ふしの御回向頼み上げますとくどき立〳〵紹入るばかりに泣つくす、沈むおもりと傍なる、苅豆籠を身のしづれ貢た追ろゝ死神のもし仕損ぜば身の恥を見廻はす傍にさびもせで研立て鎌は今宵置く、草葉の露と消よとか、いとゞ哀れを添にくる、降秋雨の足音に見付られじと吹消行燈、灯が消てある女房共累々と與右衛門が摺違ふたる門の口、誰じや〳〵そこへ出るのは累じやないかといふ聲あとに聞きさして女心の一筋にこけつ轉びつ走りゆく、ハテあやしやと見る影は慥に女房と思へども、あやも分らぬ眞の闇あとをしたふてかけり行く。

（床本）土橋の段（口）

捨に行く身にはいとはぬ村雨の涙あらそふ絹川の堤傳ひにうろ〳〵と走りつまづき漸々と胸撫でおろし！〳〵今のは慥に與右衛門殿後から追て見へしゆへ藪陰へ隱れたが定めてわしを尋れてか外に用でも出來たのかアレあの向ふの畑の方へ行しやんした後姿が此世の名殘覺悟はよふ極め

土橋の段

興右衛門　竹本相生太夫
歌潟姫　竹本南部太夫
金五郎（豊竹辰太夫
竹本陸路太夫）
かさね　豊竹つばめ太夫
豊澤仙糸

て居れど最一度逢たい興右衛門殿アイヤ〳〵此淺間しい顔形、まだ此上に水におぼれどの樣にならふと思へば一倍愛想がつきよふかとそれが悲しい〳〵と土邊にどふと身を投伏し正体涙に暮けるがアヽ悔むまじ歎くまじとてもながらへ果ぬ身と小石拾ふてそこ爰と尋る心ぞ哀れなり折から向ふに聞ゆる人聲見付られては叶はじと見やる稻村幸ひと身をひそめてぞ隱れ居る程なく出來る金五郎欲に光らす小灯燈なやませ賜ふ姫君の手を引立て土橋の上エヽ道々も言聞すにさりとてはどびつこいコレ女中樣よふ聞んせやこな樣が泣しみ付て逢たがる其絹川の谷藏といふ相撲取は此近邊にはマアないは又有た所が人殺しのお尋れ者じや定めて大方上方で女房に持とふならふのと堅ふ言かはさんした事もある故此下總三界まで尋てごんしたと言樣な事で有ふがそんな科人をさがして添ふより幸なよい事があるはいのエヽ此在所に興右衛門と言てモそれは〳〵よい男が有る時にこの女房が累と言じや其又累が顔形イヤモウどふも二目と目當て見られた顔じやないはいのそこでカノ興右衛門めも女房の累が傍では可愛のイヤ不便なと日頃からだまし透してせふ事なしに添ふては居れどどふぞ幸ひな事が有たら其女房の累を追ひまくつてよい女房と仕へたい〳〵と言て居る矢先きけふこな樣の事咄したればあいつもきつい愛者じやありもせまいにこな樣を百兩で賣てくれい今夜九つまでに金拵へて

人形

歌潟姫　吉田文作
金五郎　吉田玉幸
百姓興右衛門　吉田榮三
女房累　吉田文五郎

渡そふシタが累にはマア隱したいどふぞ此土橋までつれて來てくれい金と引がへに仕よふと言かたくの約束で追付爰へ金持てくる筈じや程に其絹川とやら言ふお尋者をしたふて俱に憂目に逢ふよりアノ與右衛門めが所へ行んすればおれも世話した甲斐があつて百兩と言ふ金あたゝまる又こな樣も早速よい男にありつくと言ふものコリヤ是二人ながらよい仕合せと言ふものじやナ何と嬉しいかチゝおれも嬉しい〳〵と己が工みの得手勝手木影に始終立聞く累扨は夫が都にて言ひかはしたる女よな我に隱せし百兩の金の入譯夫の心聞けば聞く程膜立やと逆立むれを押さげて猶も樣子を伺ひ居る姫はとかふのいらへさへ涙にむせび賜ひしが漸に顏を上げそなたのたんと世話なれどふぞ尋る絹川に逢して下され賴みます誠浮世の情ぞやコレ慈悲でござると手を合せ拜むはいのとばかりにて又さめ〳〵と泣賜ふエゝめろ〳〵といま〳〵しいげん妻じやとこぼへてもどふしても與右衛門が所へやらにや置ぬイヤとぬかすと此川へどんぶりサアあいと言へ、サアどふじやいサア〳〵〳〵何んとゝせちがふ所へいきせき來る與右衛門は累が行衛見うしないうろ〳〵尋る出合頭ヤ金五郎じやないかチゝ與右衛門かテモ早ふ出かけたなアチゝシテ約束のその女はチゝ連て來た共〳〵金と代物引替じやと泣入姫を突出せば差出す灯燈火明りにヤアこなたは絹川アコレ〳〵〳〵チゝほんにこゝは絹川の堤サ人目堤ナコレ人通りもある此往還何事も私しがアイヤサわしが此胸にナア爰でとやかふ言ふと惡い委しい事はサ委しい事は金五郎に賴んで置たによつて言ふと惡いノウ金五郎そふじやないか、と此塲を紛らす詞の端、心遣ひぞやるせなき二人がそぶりきよろ〳〵と見まはす金五郎つを呑込みハゝアヤコレ與右衛門此女の今のそぶり又我が其詞の端コリヤどふでもお尋者の絹川に違ひはないはいそふで有ふがなサアそれはサア何とゝ問ひ詰られて與右衛門が覺悟の胸はすへながら打明て得心させ一先此塲を納めんと思案極めてヤコレ金五郎そなたを男と見込んで賴みが何とこゝは一番はしを立てたもらぬかムゝ立いとは何事じやサ成程おれは

其人殺しの絹川じやチ〜そふで有う〳〵我が絹川なればこな女はさつきに代官へ配符のまはつたうたかた姫とやらうらない姫とやらじやなア〜イヤめつそふなそふよく〳〵おれを思へばこそへ〜はる〳〵と此下總までチ〜したふて來た心底者じや程にどふぞ呑込でたもらぬかム〜そりやはや友達づくの事そふ打明て名乘そなたを是非訴人しやうと言ふ程の又へ〻敵役でもないが金づくばかりはどふもならぬさつきに約束した百兩ナサ其百兩さへ今渡すなら呑込むまい物でもないサ金しよふ〳〵イヤ其金が今はないか有まい〳〵何のあろぞいアノこ〜な大泥棒の盜人やろふめコリヤヤイ己を絹川と言ふ事は晝當つて見てとつくりとすいて置たけれ共百兩の金渡そふとぬかすによつて以前は相撲取もしておつたことなれば相應にかくまいも有て金がある まいものでもないマア百兩先へ引たくつて其後で訴人して又褒美の金してやつて二はいしてくりよふと思ふたが圖へいかなんだモウ此上はやぶれかぶれじや二人ながら訴人して褒美の金にしてこまそふとかけ出すを引戻しモウそふぬかせば百年目ごふも生ては置れぬとすばと拔て切かへればきやつもしれ者拔合せ二うち三打うち合〳〵コレ〳〵申必ずごつちへも行まいぞこいつを片付立退んと堤傳ひに切結ぶ逃行金五郎のがざじと後をしとふて追て行く。

（床本）土橋の段

後には一人歌潟姫こはさひやいさ、わな〳〵と心も空にふる雨は晴れぬ思ひの稻村に始終聞程せき登す心の角を押かくし知ず顏にて走り寄り、チ〜コレハ〳〵今絹川殿の賴ましやつた上方の女中とはお前かへわしは此近所の者絹川のいはるゝには追付けそこへ行く程にちつとの間心を付けてくれといふてチ〜ホンニ〳〵おいとしや此下總三界まで戀したふてござんしたアノ絹川殿とは定めて深ふいひかはさんした中で有のとさはらぬ体に問かくれば姫君何の氣も付かずコレハ〳〵しほらしいよふこそ尋ねて下さつたがさら〳〵そふいふ事ではない自らが戀したる御方はといはんとせしが後先を思ひまはして口ごもれば扨はといよ〳〵緊か胸も

へ立しんゐを現はして何じやさら〳〵そふではないヤそふではないエ〜こなたはのふ〳〵さつきにからの樣子はアノアノ稻村にかくれて居てとつくりと聞ゐたはいのよふも〳〵はる〳〵の此下總まで男を寢取におじやつたのとはつたとにらむ其有樣ぞつと身の毛も露極も覺へなき身の姫君は何といふへもおろ〳〵聲、そんならこなたは絹川のお内儀かや自らは其樣な恨みを請る者じやない必ず相違言はしやんなや、エ〜此絹川は何してぞとかけ行賜ふを引戾し矜際しつかと聲ふるはしまたのめ〳〵といひ拔けて夫のあとをしたふのがエ〜腹の立つ〳〵と引廻し〳〵引廻されて歌潟姫多くの人にかしづかれうやまはれぬる御身にも鄙の旅路を只一人さまよひ賜ふうき中に思はぬ難にあはれともいふべき人も遠近の衒より外泣斗り。累は猶もはがみをなしエ〜思へば〳〵憎い女生置て我夫におめ〳〵と添そふより殺して俱に冥途の道連、勸念しやと鎌追取り光りは稻づま與右衛門が宙を飛でかけ戾りハツトばかりに累を引退けコハ何事と押隔てたる夫の顏見るより猶もせき立累、其まゝ夫にしがみ付きヤレ與右衛門殿、エ〜こなさんは〳〵〳〵のふ、コレ斯いふわしが見とむない顏形に成つた故あいそのつきたは無理ならねどあかしていふて下さつたらマ此樣に腹は立つまいもの。是までわしに鏡を見なといわしやつたは斯いふ顏を知らせまいとの志し、モほんに〳〵其樣にまでわしが事を思ふて下さるかと死ろ覺悟の其中でも嬉しうて〳〵拜んでばつかり居たはいのカ今よく〳〵思ふて見れば敵討を延して貰ふた兄樣への義理其義理も忘れてソレ其樣な美しい女を都へ呼びにやり、わしに難儀をいひかけて追出す心で有ふがのエ〜こな樣は恨めしいと腹立涙はら〳〵と思ひ違へも一圖の恨、ム〜扨は最前金五郎にいふた樣子をチ〜何も角も聞た〳〵サアそれ聞きやつたらそふ思ふも無理ならねどアリヤ金五郎への偽じや、何をかくそふ此お方は賴兼公と言辨あるおれが古主のお姫樣じやはやい、疑ひ晴らして俱々に都へお供し賴兼公と御祝言有までは お力になつてたもといひ聞しても聞き譯ぬ其魂は付まさとふ高しが事を思ふて下さるかと死ろ覺悟の其中でも嬉しうて〳〵拜んでばつかり居たはいのカ今よく〳〵思ふて見れば敵討を延して貰ふた兄樣への義理其義理も忘れてソレ其樣な美しい女を都へ呼びにやり、わしに難儀をいひかけて追出す心で有ふがのエ〜こな樣は恨めしいと腹立涙はら〳〵と思ひ違へも一圖の恨、ム〜扨は最前金五郎にいふた樣子をチ〜何も角も聞た〳〵サアそれ聞きやつたらそふ思ふも無理ならねどアリヤ金五郎への偽じや、何をかくそふ此お方は賴兼公と言辨あるおれが古主のお姫樣じやはやい、疑ひ晴らして俱々に都へお供し賴兼公と御祝言有までは お力になつてたもといひ聞しても聞き譯ぬ其魂は付まさとふ高

雄が執心、同性の血筋の皮肉へ分け入て姫に妬の執着と夫婦の中を逆立髪二つに通ふうはがれ聲、イヽヤイヤ其言譯聞ぬ〳〵郡にござる頼兼様其言號の姫君が此下總へ何しに尋れてござるもの、サアそれはの世上をしろし召されぬ姫君、イヤ〳〵〳〵〳〵何にも聞かぬ〳〵〳〵〳〵又其上に百兩のかれ、金五郎に借たとは何んでいやつたサア其入譯をとつくりと打明けなんだは思ひ違ひのおれが誤り、チヽ思ひ違ひがしたであろ、思ひ違ひせいではいの、コレこなたが可愛がる其女に入るかれとはしらいでの現在わしは勤奉公に身を賣らふとまでしたはいの、エヽ思へば〳〵我爲に仇敵の其女喰付ても此恨み晴さいで置ふかと又かけよるを取て引よせエヽ是程に事を分けて言ひ聞すに聞き分けぬこな業さらしめがうぬコレ累なぜ其樣にものヽ道理を辨へぬぞトハいふものヽ思ひまはせば二人か因果我手にかけし高雄殿の執着故面体ばかりかソレ足までも生れも付ぬかたはとなり、サたとへどの橋な見苦しい顔形になりやつたとて三婦殿の志、と言い、古郷をはなれはるゞ〳〵と此下總の草の中、仕付もせぬ百姓業不自由な世帶を苦にもせず誠盡してたもる心底心の器量は、昔の百倍コレ何の愛想をつかそふぞいの、とつくりと氣を沈めて聞いてたも、誠絹川が女房の累、本心五体に有るならば此道理を聞き分けて姫君の御難儀と言い此與右衛門が一生懸命の場所恨を晴して俱々に心便りに成てくれと身にせまつたるせつなさをたもちかねたる男泣猶立さらぬ執着は妬み恨みの二つの角、生出るばかりいかりの顔色、イヽヤ何にも心は違やせぬさつきにも其樣に涙こぼして此わしを誠しやかにだましやつたぞやモウ其手は喰はぬはいのふ〳〵日頃いとしかはいヽと思ひ込だ我夫にだまされたと思へば憎いのも又百増倍、モウ此上は大勢の人を殺した絹川の谷藏は垣生村の與右衛門でござりますと代官所へ訴人すると狂氣の如くかけ出せば驚く右與衛門姫君もこは〳〵縋る袖袂見るも腹立頻憎やと持たる鎌にて姫君の肩先すつぱり、あつとばかりにかよはき御身ハツト悶り氣は轉倒もぎ取鎌を放さざこそせり合又先は

累が咽喉ぶへ流るゝ血汐に又悔り、コハあやまちしかはいやと抱きかゝへて介抱にくるしき中にも逆立面色コリヤ〳〵わしを殺すのじやのアゝイヤ〳〵怪我じや〳〵はゝやいイヤ〳〵怪我じやない殺すのじや〳〵〳〵チゝ殺さば殺せとても添れぬ我身の上死だあとでも此恨み晴さいで置ふかとたけりのゝしる黒髪を手にからまいてはら〳〵涙エゝ情ない因果じやなア大切な姫君に過させて御主人へ此與右衛門がどふも〳〵言譯がないわいやい是程の事聞き分けぬ兼ての氣質ではなけれ共何をいふても魂は入れかはつて高雄殿の悪念が皆なす業所詮叶はぬ急所の痛手我手にかゝつて死でくれさりながら本心ならぬ女房を殺すおれが心の内どの樣に有ふと思ふぞいやい斯言ふ譯とは露しらぬ世間の人の口の端に埴生村の與右衛門が女房累は心も器量も悪女故夫に殺され死だ後樣々の仇をせしと末々までも因果咄しを殘さふかとそれが不便な可愛とさしも丈夫の男氣も愚痴に返りし恩愛に猶もへ立執着心姫を〳〵とかけよる累エゝぜひに及ばぬもふ是迄と思ひ切て打込鎌かつぱと轉ぶ土橋の草葉朱染なす血汐の堤とふもすべつてころ〳〵〳〵頃しも秋雨降しきる天の悲しみ目前に敵同志を先き生から結び合した悪縁かと悔ながらにとゞめの鎌涙累が物がたり今に殘るもあはれなり。

むざんの有さま見捨るも御主大事とかけよつて抱かゝへて介抱にふつと氣の付歌漏姫ヤアそなたは絹川、姫君樣スリヤお身におかげはさればいの自らも肩先きから切られしと思ひしが其後は氣を失ひ何事も言はざりしがマ不思議な事と撫廻す肌身に添し祐天の六字の名號表具共はすに切られしはコハいかにと仰せに與右衛門心付きハテ扨は常々御信心淺からぬ祐天さまの御影殿御身に過ちなかりしがハア有がたし〳〵このひまに姫君樣一刻も早ふと立寄てせめて累が此死髑髏み寺へと思へ共事現はれては一大事此川の名の絹川へ未來は一蓮托生と涙と俱にながしやる、水葬禮や與右衛門姫も俱々手を合はせ

南無阿みだ佛南無阿彌陀佛なむあみだ佛〳〵みだ佛と唱ふる聲や鉦の音愛別離苦を今爰に見捨て見捨る浮別れ逃延たりし金五郎いつの間にかは窺ひ寄姫を引立かけ出すがんづか摑んで引戻し足下にしつかと踏付けてヤアしこりもなき泥坊め、助け置ては後の邪魔と毒喰はば皿合點じやさらば〳〵の聲ばかり別れてこそは急ぎ行く。

飯原兵衛屋敷の段

中　豊竹呂太夫
鶴澤　叶
切　豊竹古靱太夫
鶴澤友次郎

人形

奥方藤巻　桐竹政龜
飯原兵衛　吉田玉次郎
親與茂作　吉田榮三
娘おそよ　吉田文五郎
一子　隼人之助　吉田光之助
司　姫　桐竹紋太郎
朝日奈三郎　吉田玉松

第二　岸姫松轡鑑

飯原兵衛屋敷の段

寶暦十二年の初演で作者は豊竹應律淺田一鳥、若竹笛躬等の合作になる飯原兵衛の館に預けられてゐる司姫は兵衛の一子集人之助と不義を働いたために世を憚ると稱してゐたが實は賴家公と契てその胤を宿したので朝比奈三郎義秀が使者として姫の首打つて渡せと迫る、兵衛にはおそよといふ娘があつたが幼少の頃竹生島で難船して家來の與茂作と共に行方知れずになつてゐた今日その十七回忌の供養に計らずも其のおそよが與茂作と共に尋ねて來た兵衛は顏を合せた娘を姫の身代りにと思ひ付いた苦肉の計を以て兵衛は姫の身代りに我子の首を打つといふ人情の機微を穿つた切々の大作である。

（床本）飯原兵衛屋敷の段（中）

丸く共一角あるや角屋敷飯原兵衛秀景か棟門高く舞鶴の紋も名にあふ堅くな武士忠義やたけの强弓も引るゝものは恩愛を弔ふ法の經陀羅尼菩薩も爰に極樂寺の切通しとぞしられける、上使は名にし若者の朝日奈の三郎義秀兼て兵衛と不和の中ずつと上座におし直れば心外ながら頭を下げ御上使御苦勞千萬と挨拶すれど會釋もなく上意の趣きよつく聞かれよ、貴殿が預かる司姫かりの御息所と、勅命の身を以て不義のふるまひ君の逆鱗是によつて姫の首討て渡さるべ

し刻限は初夜を限り檢使は則此朝日奈との仰せなりとさも大へいに相述る飯原兵衛膝立直しコハ思ひ寄らざる御上意先達て申す通り此儀に付て姫君にはいささかも誤りなし御承引なき姫君へ無体の不義をしかけしは悖隼人之助彼が首を討とあれば畏り奉らんが科なき姫の首討事は羅りならぬヤアいふな秀景扨は御邊上意を背くか鎌倉殿中より仰を請けて參つた某又北條が申すには隼人之助に用事有某に同道致せよとの申次へ〜ンさしも名にあふ飯原殿も不意を打れて途を失ひコリヤちと狼狽召されたのヤアだまれ義秀汝如きの若輩者猪武士の知る事ならず辯舌を以て人を惑はす北條の古狸にたぶらかされて來る義秀いかに御上意なればとて先君頼朝公の御舍弟節頼公の御息女司姫の御首かるがる敷討といふ汝が心底いぶかしゝア〜聞へたもとより不和の其方なれば私の意恨を差挾み君への忠義サ忘れしなハ〜〜〜口がしこくも申したり己が心に引くらべ君への忠義忘れしとはぬらくら武士の汝が事さ持てまはつた姫が身の上當時天下の御母公と人も恐るゝ尼君の仰せを背くを忠義とサ思ふかやい狸親仁はいざ知らず猪でも我武者でも上使に立たる此朝日奈和主が首を得討さ身共が奥へ踏込で手間隙なしに討てやらふか、ヤア上使と思ひ用捨すれば付上たる雑言過言、此飯原が預つた姫君汝に指でもさゝそふか、ヲ〜討て此ま〜歸らふかサアならば手柄に討て見よヲ〜討て見せふと双方が鍔元くつろげ立向ふ中を藤卷押隔イヤ申し朝日奈様得と夫の心もなだめ叶はぬ筋ならハテ何とせふ御上使のお顔の立つ樣追付返事致させませふそれまで暫し御休足御案内をと和らけるる詞に猶も角を立ヲ〜サ待てと言はゞ刻限まで首受取られば歸らぬと座敷を蹴立入にける後に兵衛はとやかくと思案に休息次の間を明て入さの月詰る襖の工合いく度も參る心は初瀬寺御名をとなへて親子の順禮コレ〜報謝入ませふと腰元が出て招き寄盆に打まき包錢さし出せば親仁はこ〜ハイ〜〜これは有難いお志併しか樣に家々で御詠歌を唱へますも觀音樣への御奉公なれば御報謝は受ませぬ其替りに御無心は少の間休まして下さ

りませ娘が足を休めてやりたふござります、チヽそれは安い事サア〳〵こちへと伴ふ内、奥より藤卷立出てチヽ殊勝な順禮衆やけふは大事の祥月命日取込な事さへなくば一夜も留てもてなさふにサアマア爰で茶でも呑み緩りと休んでござれやといとれんごろの詞のうち娘は傍りきよろ〳〵と不思議そふに見まはす顔與茂作は氣の毒がりコリヤ〳〵おそよきよろ〳〵するぞいやいハアきこえたつひに見ぬ結構なお屋敷見てコリヤアノ途に迷ふたのじやなといふに娘はコレ〳〵とつ樣此中續いて夢に見た結構な金の間で馳走に逢ふたは此お屋敷も微塵も違ひはないはいの、ハテつがもないそんな事言ふなイコリヤ人が笑ふぞよイエ〳〵それでも表の門に舞鶴の紋も付てある、ソレ〳〵とつ樣夢のはなしに言ふたじやないかへほんにそれよデモ不思議なと爺親も見廻す中に奥の間で經の終りのりんの音與茂作はにじり寄イヤ申奥樣今おはなしの御法事は御先祖樣か御一家衆のお弔ひでござりますかへチヽされば いの、けふの佛はわしが娘十七回忌でござるわいのハヽアさよならおちいそふでお離れなされたのでござりませふといふに藤卷打しほれ娘が死だは二つの時思ひ出すも涙の種順禮のこなた衆に譯を咄すも娘が菩提、回向して下されやわしは此家の後の妻先の奥樣が殘されしは男子一人わしも一人子がほしさあの鎌倉の初瀬寺の觀音樣へ願をかけ程なく設けた娘の子生れ落ると病身故色々心つくす中順禮をさせたれば神がかたいと有し故乳母に抱かせ家來をつけ祈願を込めて順禮にモ出す事は出したれ共それより何の便りもなし勞はしや可愛やと歎いてくらす十七年けふの佛事も先達し娘や乳母が蓮葉の佛果を得たるかしられ共母が仕立し笈摺を着せて出立の門送りちやうち〳〵の笑い顔目先ちよ〳〵ちら付て忘るゝ日とてもないわいのふ、折に音のふこなた衆二人可愛らしい其娘を見るに付けてもいとゞなお得忘れぬとばかりにて涙にくれて語りける、與茂作は惚り顔ヤ待しやりませや、チヽそふじや〳〵イヤ申奥樣其お咄しの娘御は息災でござりますぞへ、チヽこな人はつかもない、イヤサア今おつしやつた其お

子は此娘じや逢せりませと聞て驚く母親よりおそよは猶も不審顔チヽコリヤ娘合點が得まい今までいはねばマ不思議がるは道理〳〵おそよが着たる笈摺ぬがせサヽ是見やしやりませ此肩に繼で有のが此娘に着せてあつた笈摺何とお見知りがござりますかヘムヽドレ〳〵チヽコリヤ是私が手づから縫ふた笈摺扨は其子が我子かと嬉しいやら悲しいやら扨しもどふしてながらへてとくどき歎けばノウ母様産のお前が此世にとは思ひがけもけんによもないそんならなんの父上も御息災でござりますか、早ふお顔が拜みたい、ホヽウそれへいて逢ふぞと一間を直る飯原兵衛娘が顔を打詠めムヽ我こそそちが實の親最前がらのはなしは一間の内で聞きしぞや、死せしと思ひし我娘此年月に歸るとは全くそれなる親仁殿の御情け、命の親共神佛共イヤモ禮は詞に盤されぬと挨拶の内母は差寄りイヤノウ親仁殿死だと思ひし娘に逢ふてモウどつちへもやる氣はないどふぞあの子をわしに戻してたもらぬかと賴めば與茂作打うなづきイヤモウ大事の娘御ほんの親御へ手渡しすれば私も安堵致しまする、チヽそれは嬉しや忝ひ、始終の禮は緩々と申そふコリヤ〳〵腰元共親仁殿を一間へ伴へ娘も俱にと母親が詞に娘はアイ〳〵〳〵サア〳〵とつさんござんせと案内に添ふて嬉しげに親子打連れ入にけり、後見送つてコリヤ女房最前賴日奈に受合置たる姫の首、幸來たる我娘討て渡せば能身代りエヽコリヤエヽヽヽヽ大切なる命にかはる果報者、サアそれじやとて胴慾なカア詮なきくり言未練〳〵娘を爰へ呼出ださば只何げなく髪かたち姫君に似せナア欺し寄せてすつぱりとナア、一大事じやサ仕損ずなと言捨行も親心はげみを付ける澁面に流るヽ涙押かくし。

（床本）飯原兵衛屋敷の段（切）

後に藤卷只一人夫の詞用ひてや司姫の一大事我子を切つて身代りは末代家の譽ぞやさりながら欺し討に殺せとはいかに忠義といゝながら十七年めにめぐり逢まだたんまりと顔容見覺る間もあることか來ろと其日に身代りとはむごいつれない兵衛殿様子を得と言い聞かせ其上の事アゝいや〳〵一應で得心せれば今宵五つの間に合はず逃る共叫ぶ共討たればならぬ手詰と成其彼これが奥の間へ洩れ聞へなば朝比奈殿偽り首と請取らぬは必定スリヤ切つたる首に功もなしハテナア不便ながらも欺して討がよいはいのチ〜夫々おそよ〳〵と思ふ生滝の戸襖を明けて娘はいそ〳〵とかゝ様お呼なさるゝは何の御用でござんすと裾かき合はせ座に付けばいとゞせきくる胸なでおろしイヤコレおそよ今までとは違ふての飯原兵衛と言ふ武士の娘髪容も屋敷風にチゝドレ〳〵取繕ふてやりましよと鏡臺直せば嬉しげに、ア、それはマア〳〵有がたい長の旅路に草臥てツイ取上のつくれがみ慮外ながらと押直る姿容も見納めの筐と思へば胸せまり詞も涙にくれながら後に寄て何氣無櫛取上て漉かへす結びもとめぬ玉の緒は一櫛宛に拔櫛の暫し此世を假髷とも先きには知ぬ下髪も見かはすばかりに結立て髷のおくれを撫付け撫上透を見合せ隠し持つ刀すらりと鏡に影娘は飛退コレかゝ様何の科で切らしやんす何で〳〵と身をふるふチ〜是々娘水子でわかれけふの今蘇つて來た大事のそなた夫を殺すは大切なお主様への忠義じや程にノコレ諦めて命をたもやと切付ける與茂作一間をかけ出て母を突退娘を圍ひエ〜こりや何とするのじや〳〵テモマこなたは顔にも似合はぬ恐ろしい母御じやのコレイノコレ殺して貰ふとて育上て連てはこぬはいの娘よこいと手を引て逃出る向ふへ飯原兵衛ヤレ待たと言へど押退刎のけ譯を聞かれば詮方なく親仁引伏くゝ上げ傍なる柱に猿緊ぎ縛られながら身をあせりコリヤ〳〵娘おらを捨置早ふ爰を逃てくれヤレ逃てくれやいと言へど娘はうろ〳〵と親を大事と付纏ふ飯原兵衛秀景親仁が前に兩手を突ハゝ段々の我失禮水子より

今日まで親にも増る養育の大恩まづ以て忝けなし心せくまゝ仔細も言はず産の親とて我儘に殺そふと申はイヤモ不調法が何なか包まん某預り居申大切の姫君と申すは忝くも蒲の冠者範頼公の御息女司姫然るに頼朝公より首討て渡せと有るお使者参り則ち其使者は朝奈比三郎義秀元より彼とは不中の某今宵五つの鳴までと請合事は請合いしが今天下の亂を失ふ瀬戸際忝くも其御身代りに立る娘ナコレ〳〵〳〵〳〵〳〵爰の道理を聞分けて娘が命を賜はれよエ〜ならぬ〳〵〳〵〳〵〳〵なりませぬぞテモ扨も侍と言商賣は胴慾な物じやよのコレイノシよふものを思ふても見やしやれの他人が親子となるといふはモよく〳〵の因縁事扨おらが毎日漁に出ても網をまだおろさぬ先きに自然と船へ飛込む魚は瀬滅しとて放してやり、何ばでも殺しはしませぬ又狩人も懐へ這入つた鳥は取らぬと言、可愛そふに此娘血筋の縁が有ばこそ眞實の親達にめぐり逢ふたはコレ祖父様お前の影じやと悦んで最前もアーアレアノ一間で手を合はして拜みましたはい、拜んだはい〳〵〳〵コレ〳〵〳〵まつこと身代りせいでならざおらがコ〜〜この白髪首を切つてのおそよは助けてくださりませコレ拜みまするこ後手にしばられた手をすりこすり身をふるはして泣叫ぶ道理と思へど聞き入れずおそよが方へ打向ひコリヤ〳〵娘そちを育しアノ親仁承引ないも理ながら委細の譯は聞く通り手しほにかけし娘なら只一討ちに御用に立つれど幼少より他人の手にて成長となつたる其方故親ながらもこと譯て言聞かす諦めて命をくれい猶豫ならぬ時宜なれば一時も早く得致せと詞尖に詰寄ればおそよしとやかに手をつかへお詞背きは致されどわたしや此世で只一目逢たいお人がござんする過つる頃源の頼朝様竹生島詣の時觀音堂に御一宿島中の娘子供お茶の給仕に召寄られ私も終宵勤しに若い殿御が長廊下で通る私を引留てそれは〳〵恥しい初は憎やと思ひしがつい其人がいとしうなりとゝ様の下さんした來國光の守り刀ふち頭は紅葉流し目貫は金の唐子相模又逢まで の筐にと渡せば先にも其時に素袍の片袖押切て所を問へばアノ鎌倉と

後はお立ちで騒ぎ立名をきくひまも波の船甲斐なき戀路と思へ共忘れがたなくなつかしく此順禮を幸に鎌倉を見せていのと言ふたも若や戀人にめぐり逢んを力ぐさ道の間も其人に添心ぞと樂しみに肌をはなさぬ筐みの衣是見賜へと身に添へし風呂敷包みとく〳〵と明けて見せたる素袍の片袖見るより母は驚きて一間を見やれば隼人之助ホヽ其顔の筐みは是なるかと守り刀を投出せば娘は取上打詠めヲヽこれじや〳〵申かゝ樣是でござんすはいなアヤア何と言やるスリヤ是に相違はないじやまでアイナハア悲しやコレ〳〵娘そなたが生れ落るとの、さるお聖に尋ぬれば佛神へ願ふもふし子は順禮させば命長しと聞くと餓に乳母諸共旅の用意にお上を恐れ笈摺に國所も書す其時持せし短刀を今また是を所持するは現在兄の隼人じやはいのエヽ〜と驚き口ごもり餘りの事にあきれ果面目もなき次第なりおそよは立て與茂作の繩目をほどき申祖父樣咄しを聞けば二つ年よりたとへがたなき御苦勞かけ其大恩も得送らず產の親より大切にと思へば此身の徒で恥かしい事聞しますおゆるしなされて下さんせ〳〵エヽイヤ申父上樣命の御用差上ませふサア〳〵申かゝ樣早ふ切て下さんせとあてがはれては今更に母が心は闇の闇エヽ因果の上の因果やと顔見てはなき奥の間をながむる目さへ泣きはれてとかふいらへもなくばかり父は尖どき聲あらゝげヤア飯原兵衛秀景とて人にも心置れし其其兄弟密通致せしとは犬鷄にも劣りし奴最早人間のまじはりならずせめては姫の御用にたち其力にて佛果にいたれと刀引提立向ふ與茂作見るより走り寄りアヽマヽヽマア〳〵待て下さりませ〳〵おまちなされて下さりませスリヤ早實の親御の切らしやる事娘も又得心の事なりしたがコレ此子を育てしをあらまし咄しませふかい、エヽ十七年後竹生島へ渡る人影し參詣群集扨八つ過の頃戌亥よりおかしな雲が出ると早叡山の吹おろしソリヤと言ふ間も湖の船は木の葉のちる如くいやもふ〳〵〳〵口でいふ樣な事じやござりませぬテ其中に稚子を抱きし女中拘帶にてぬしの肌へくゝり付まさかの時はおよがんとサ其身拵しらへはよけれども

中々及ばぬ事じやて夫と見るより漁船を漕付け引乗て助けたが彼女中船中騒動の砌り船端で急所を打五体の痛み物言はず其子を敎へ涙を流し頼む〳〵と言事が其儘往生とげられたアなむあみだ佛〳〵それに付けても此稚子殿段々成人するに付實の親御へ手渡しと思へど所も名も知れず月日重る其内に此頃ふしぎな夢の告御出家がきて枕に寄手を取るばかりになされたで俄に踏出す西國順禮まはり〳〵て親たちに逢が相圖に殺すとは宿世の罪がまはり來たそなたの因果付添まはるおらも因果じやはいのもふ此上は死て未來へ連立ふ潔にそなたも死にやアイエ〳〵泣なアイ泣きやんな〳〵〳〵〳〵土産にはまはり殘しの御詠歌三十番は札を打ち今三番を唱へてのコレ往生遂やイヤ申お二方樣詠歌三番唱へる間暫時お延し下さりませホ〳〵今暫く間もあれば佛間へ迎ひ急がれよイザ案内せん兩人と先にすゝめば興茂作はおそよが肩を力共杖折かゞみの親子連伴ひ佛間へ入相の無常を告る鐘の音八千年や柳に長き命寺、こなたの一間に立聞く母親是が〳〵何の長い命丸々生きて十八年二つの年に別れたを死別れじやと今朝までも片時なかぬ隙もなくけふと言ふ今日半時程親子名乘りの笑ひ顔十七年めに泣やんだ餘りを今又此樣になま中ちらりと顔見せて又新らしう悲しみを百倍添へて泣かすのかあの子と私は先の世でどふした敵が結ぼれて親子となつてきたぞいと泣々覗くも及びごし歌も後れて觀音寺遠き國よりはこぶ歩みをコリヤ〳〵娘遠い國からはる〳〵と殺しにばかり此祖父が連て來たかと思ふ程おりや悲しうて〳〵ならぬはいイヤなふ祖父樣もふ三十三ばん美濃の谷汲詠歌も終りチ〳〵命も終りじやはい名殘に私が諷ひませふイヤもふし父上樣も來てたべと呼聲聞いて母親は今が此世の別れかと思へばいつそ涙も出ず身も世もあられずうろ〳〵と足爪立て差覗き身をあせる中諷ひ出す今まではおやと頼みし與茂作が是なふ暫しと泣聲も音はゝつさり奥と口思はずわつと聲を上身を投伏て娘が首互ひに手をかけしがみ付き前後正体取亂し絶入るばかり泣叫ぶ次の間より隼人五助走り出父が前に兩手をつき某妹と不義の振舞聊な

し最前の守刀は御主人鶴が岡下向の夜道何者共知れず北條へ打かけし手裏劍立たぬを幸ひ某が密に拾ふて立歸る然るに先刻妹が僅にやりしといひし刀目貫ふち頭寸分違はぬシヤ是幸ひ其夜忍び逢たるは兄弟と思はせなば執着の念のはれ清く最期をさせん物とナコレ思ふも姫君御太切始めて逢た妹に睦じき名乘りも致さず別れし事のふ便やと語を聞て母親も父も安堵に晴るむね一間の内に聲あつてヤア〳〵方々それへ參つて朝比奈が物語る子細ありと間の襖を踏開き司姫を小脇にかゝへ勢ひこんで義秀がすつくと立たる有り樣にはつと人々秀景より興茂作は只仰天に顔うち詠めて詞なし始終を聞て司姫自ながらへ有し故夫婦に苦勞をさすはいの自害せふにも朝比奈に押とめられ死れぬ事なら身代に立てたもつた言譯に尼ともなつて弔ふそれがせめての言譯ぞやと身をもだへてぞ伏沈む、朝比奈兵衛に打向ひ某若年の頃賴朝公の御前にてふと爭ひしが意趣となり年月互ひに張を含み左程意根の中なれど此身代りは請取にやならぬ其仔細と言は最前の守り刀是へ納めて見られよと言ふに不思議は覺への鞘件の刀にしつくりとさし者兵衛もいぶかしく仔細いかにとたづぬれば朝比奈思はず涙を浮べ誠や一日の情けに百年の命を捨るとは此事其頃竹生嶋御供の時一こん酌しほろ醉紛れ最前娘が咄した通り我も僅を誰がのやら引裂やりし素袍の片袖其後二念も付すくらせしに娘心の一筋に我を夫と思ひ詰海山こへて來りしとはコリヤ過分なぞよ忝い一間の内で義秀が聞苦しさはいかばかり今一度頼見せたらば何程か悦ばんや身躰轉倒すれ共イヤ〳〵重き役目の此義秀又二つには物語り致しなば未練をおこして姫君の御身代りの妨げ共成んかとこたへにこたへて居たはやい赦してくれ了簡せよ武士の胤程有る娘草むらに生立つても詞違へず來りしは義秀が女房恥かしからん汝も其眞心を妻と定め一生不犯でくらすぞと心の千倍胸一ぱい鬼をあざむく兩眼に流す涙は布引の女瀧男瀧も斯やらん飯原兵衛詞を正し八幡太郎義家公より拜領せし鶴の丸何と聟引出に進ぜたし不肖ながらお請けあらば草葉の蔭でも嘸や嘸娘が悦

だいかばかりと半分聞て何が扨不中を直す彼が中立宿意は消て聟舅いざ〳〵隼人同道せんと首桶か〻へ立出れば藤卷暫しと押とゞめコレ申御前は濟でもあの姫君よゝゝゝそりや此秀景が思案有りコレ〳〵與茂作聞かるゝ通りの次第なれば其方かくまいくれまいかハイ〳〵何が扨〳〵シタが大事のお姫樣外にお供はアいや〳〵大勢ついては人目に立恐れながら姫君を其方の娘に仕立今宵の内に一宿でもと聞くより肌の笈摺を娘も連る心ぞと姫に着せたる二世の緣父は死骸を舁いだき結ぶ涙に與茂作は順禮札を胸に乘娘がまはり殘したる札所は繼いでまはれ共つがれぬ命なきからにさらばと言ふもむせび聲旅へ立つ人出行く人止る人も涙果しは泣別れ返らぬ敎へ會者定離愛別離苦は法のゑん迷はぬ道ぞ賴もしき。

戻駕廓囃の段

涙花次良作　竹本鏡太夫
かむろ　竹本南部太夫
吾妻與四郎　豊竹竹太夫
野澤吉彌
豊澤廣助
（鶴澤芳之助）
鶴澤重造
鶴澤友衛門
（鶴澤友作）
鶴澤友二
（野澤喜代之助）
野澤八造
鶴澤團伊三
（鶴澤福太郎）
鶴澤駒太郎
豊澤新太郎

戻駕色相肩

廓噺しの段

櫻に霞む朱雀野を遙かに見渡した洛陽紫野あたり吾妻の與四郎と涙花の次郎作とが四手駕を下して互にお國自慢から廓話になり駕の客なる禿を呼び出せば谷の戸開けて鶯のまだ廓馴れぬ風情で禿も駕から現はれ禿を相手に三人が廓話に華を咲かすといふ廓氣分横溢したものであります。

（床本）

廓噺しの段

あら玉の年を待ち侘びて待たるゝ顔にまつかほを、合せかゞみのふとんさえ、色でもてるか四ツ手かご、花も人呼ぶうは氣の花が、月に浮かるゝうは氣な月に、うきにうかるゝ月花に、與おれ込じや、次合點じや、かた山じや與合點じや。下戸は酒手ではぎの花次呑込んだ、與樣はなる口こちや色上戸二人もみじも風にやつしごく拍手取々來りける、與へエン、籠り出でたる者は吾妻の與四郎と申す駕かきにて候、次へエン、籠り出でたる者は涙花の次郎作と申すゑらい駕かきにて候、與アゝコレ〳〵なんぼおぬしが涙花〳〵と云つても、江戸の樣な事は有るまい、次イヤ何ぼこな樣がそういはんしても、江戸は又大阪のやうな揚屋はござんすまい、與アゝ中の町のさうろうが見たいわい、次そんなら住吉、天滿、高津登りの樣な面白い二

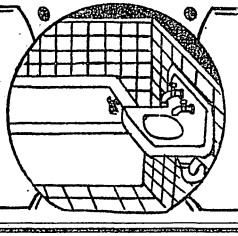
○加は有まい、與事も惡や、御殿山飛鳥山、上野の樣な櫻は有か、次ヤこいつは一番あやまつた、與へーンちつとそふ有まいかハーーー何と役にも立ぬ事をいかいたわけだわい、時に棒組、あの山々の景色を見やれ次ドレ〳〵成程、アーよい景色だわい、あれを詠めてさらば一服、二人致さうかい、ふりさけ見れば雪ならでおのが羽こぼす白鳩や、雲の煙草の薄煙、輪に成梅に鶯の、またさゝなぎの摺火打、石よりかたいかた棒組に、角のとれたる息杖は、五枚銀杏に三ツ銀杏、よい相肩の民駕、與何と次郎作おいらがのせて來た振袖は、何で有ふナ、次あれは島原の傾城、小車太夫の禿さ、與そんなら爰へ呼出して廓の咄を聞ふちや有まいか、次是はよかろふ、サア〳〵姉さん、爰へ出さんせ〳〵禿アイ谷の戸あけて鶯の、まだ、里なれぬ風情にて、おもはゆげなるその姿、詞もふし爰は何といふ所でござんすへ次爰は紫野といふ所さ、禿そんなら爰は紫野といふ所かへ、與そうだ〳〵、時に姉樣、何と島原の廓の咄を聞かせる氣はないか、コレそのかはりおれも又、江戸の吉原の咄を聞かせる、コレ棒組、おぬしも新町の咄をする氣はないか、どうだ〳〵次そふいへばおれも又、新町で花をやつた者よ、此鳶舁に引かへて、紋日物日の出立は、腰卷羽織ひとつまへよしや男の丹前姿やりかけ〳〵くはんくはつ出立、アー見せたいわい、與つうで有ふよ、迚もの事に其咄が

人形

浪花次良作　吉田玉松
かむろ　桐竹紋十郎
吾妻與四郎　桐竹政龜

聞たいわい、次成程咄して聞そうがかんじんの羽織がない、禿こ、変にお大盡の羽織が有はいな、次ヤコレハ幸、シタガ羽織があつても、大小がないわい、與ナットそこらは合點と、息杖取つて差出せば次是も新し風俗と、其儘取つて摑み差、又古に待合せ立歸りふつてふり出す花吹雪、振出す〳〵花の雪よの、こしまき羽織くもの帶上の町ドッコイ、下の丁ドッコイ、中の〳〵中の丁、さまにこがれて柴船の香り床しき一ツまへどつとほめて通した、遏東の男山ヨイコラ、どつこい、ヨイヤナサア〳〵〳〵是から江戸の吉原の咄、與四郎所望〳〵與先おれがぬれ事といふは、江戸町でなし、二丁目でなし、恥しながらへ小店でしやれてアリヤ〳〵〳〵ヨイサ、おゝと女郎衆はなぜにふりやんす〳〵雨か雪かとぬれてしつぽり、しめて寢た夜はひげ〳〵〳〵〳〵をば引れた、ヤコレひげをば引れた、きつく引れてサア目がさめた、三五夜なかにまん丸顔でナしやれた姿の赤前垂がソレ〳〵〳〵〳〵袖を引れた、朝は戀ならば枕はしない、まくらはせじとよふ言ふた、そりやこそお立じや〳〵小氣味よい程きふ〳〵引かけろ、扨も身につく吸付たばこ名殘おしくもせき立られて駕をかたげて急ぎけるサア〳〵〳〵おれが咄は是で仕舞だ、是からは姉さんの番、何ぞ面白い咄所望だ〳〵そんなら禿私も里の咄、恥しながら咄しませふ、花よ〳〵とかれやる客は、しんぞふり出す八文字すかん男は皆すかんぴん蓼喰ふ虫も逢馴染て身に泌み渡る淵瀬川、總踊戀ばさま〳〵有が中にわけて戀路は逢戀待戀忍ぶ戀、我戀は必ず今宵も合點か、合點〳〵そなたも合點我等も合點あい圖の手くばた呑込んだ、エイ〳〵えいやと手を打、鳴は夜明の鐘の音、踊り戯れ諸共に、かしこをさして歸りけれ。

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町一六二七六九
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮一九七六

四ツ橋畔
より

四月の文樂消息日誌

文樂人形淨瑠璃保護に關してはさきごろより公私共に多大の關心を寄せられ絶大の同情を賚り、爰に文樂協會の設立を見る運びにいたりました、大方皆樣へ感謝いたしますと共に益々今後の御聲援を御希ひいたします。

文樂協會設立準備のため左の通り委員會の會合を催されました。

四月四日　午後四時より討議に入り會則の研究、發起人の推選等。

四月十五日

準備委員の方々がお集り種々意見の交換がありました。

四月十八日　午後六時より討議に入り協會設立の準備を着々進められました。

四月廿六日　午後一時より發起人會を開催し、二時より舞臺に人形淨瑠璃を實演し開演中各所に於て太夫三味線人形遣が交々説明をし人形淨瑠璃の本質を實地に徹底させ大方皆樣の御滿足を得ました。

四月十九日

京都帝大御在學中の東伏見伯には東本願寺法主並に裏方御同伴にて御見聞あらせられました。

現代的

電話戎三七五六番

大阪毎日新聞が新興キネマに提供する映畫小説の巨豪篇募集

◇條件…新興キネマの幹部俳優、中野英治、高田稔、岡田時彦、入江たか子森靜子、鈴木澄子の六名が一の映畫に主演しお〳〵が活躍することを豫想して製作された映畫小説であること、もちろんこのほかの助演者はいくらつかつてもよい。

◇種類…現代劇、特にシナリオ風に記さず、映畫小説、すなはち讀みものとして興深きものたること。

◇取材…取材講想は隨意なるも飜案、飜譯はとらず、嚴に創作、創案たること

◇長さ…映畫化して約十卷乃至十五卷に纏るもの、四百字詰原稿紙百枚以内

◇締切…昭和八年五月末日。

◇發表…昭和八年七月中のサンデー毎日誌上に入選結果發表。

◇選者…大阪毎日新聞社編輯局選。

◇匿名…誌上、映畫とも匿名は差支へなきも原稿には住所氏名を明記のこと

◇添削…映畫化に際しては添削補筆することあるべし。

◇返却…原稿は一切返却せず、

◇版權…入選作の映畫撮影權並びに一切の版權は大阪毎日新聞社之を保有す

◇送先…大阪市北區堂島大阪毎日新聞社「映畫小説募集係」あて

賞金三千圓

一等	一篇	二千圓
二等	二篇	各五百圓

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行屆の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。

四ツ橋 文樂座
前賣切符專用電話南四七一一番
電話南 三七四〇八番
三七八〇八番

・設備斷然東洋第一！

アイス・スケート場

A（大）リンク 二百坪
B（小）リンク 百坪

特に初心のお方を歡迎いたします

初夏風薰る!!
絶好の行樂!!

毎日 午前十時 至午後十一時
日曜、祭日に限り午前九時より
・一般外來入口 北側電車通り
・御觀劇の方は幕間の時間を利用して御自由にお出入りして戴けます。

大阪 歌舞伎座 アイス スケート場

點焦の觸感代近代する旋廻を上盤璃玻

・結氷狀態は最も良好・

歌舞伎座

五月五日初日

（ルの部）
岩倉具親
ひらかな盛衰記
涙の四辻
明烏

・東西合同大歌舞伎・・・

（ヨルの部）
頼朝の死
三社祭
關取千兩幟
人お吉
尙武刀

中座

廿九日初日
・松竹家庭劇・
煙にまかれた話
竹の子
お蝶夫人

街の人氣者
手

浪花座

廿九日初日
・扇雀・小太夫合同劇・
盥原多助
大森彦七

次郎長裸道中

角座

一日初日
・東西落語家芝居・
國定忠治
太十

沼津
源平魁躍躍

松竹座

廿七日封切
ルネ・クレイル氏一年一度の名畫
巴里祭
エドモンド・ロウ氏主演
ウイン・ギブスン嬢主演
爆笑する惡魔

近滿蒙龍騎隊
心の青空
封夜毎來る女
切武器よさらば

朝日座

廿九日封切
川崎弘子主演
忘られぬ花
林長二郎主演
俠客春雨傘

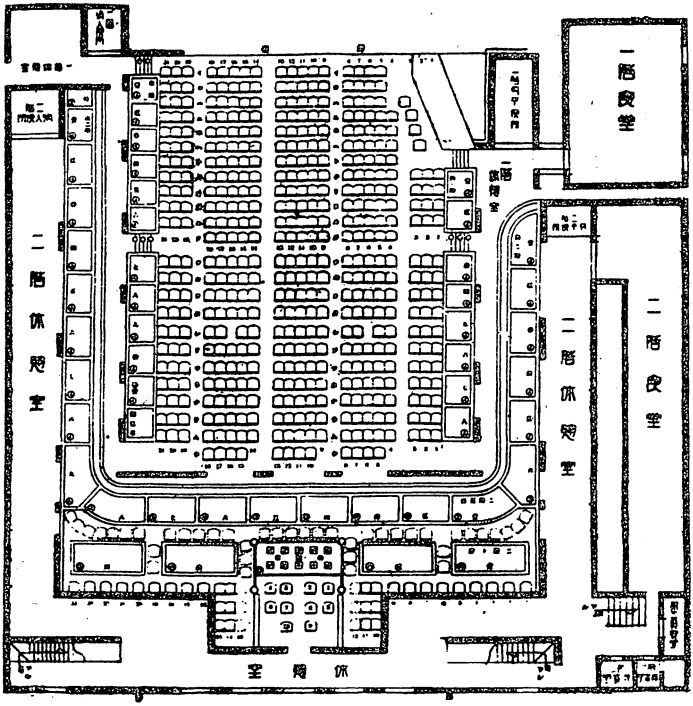
近晴
十日封切
泣き濡れた春の女よ
白鷺の春
鼻唄仁義來

辨天座

廿九日封切
阪東英三郎主演
江戸城心中後篇
森雅子主演
仇なさけ

近感激の人生
日間封切
瀧の白糸
一貫
復讐鬼

文樂座御席場御案内



御、觀、覽料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切・符・賣・場・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尙多人數樣お團体樣のお申込も御相談いたします。

豊田書房
(3261) 1589

文樂座人形淨瑠璃

五月興行夜の部は

午後六時開幕

碁太平記白石噺

吉原揚屋の段

若手新進連の掛合の華やかさ

本朝廿四孝

十種香より狐火まで

巨星土佐太夫（吉兵衛）の美聲至藝

金比羅御利生花上野譽碑

志渡寺の段

巨豪津太夫（綱造）によつて久方振の上場

增補忠臣藏

本藏下邸の段

精鋭大隅太夫（道八）の活達な妙技

夜の部料金

一等	二、五〇	二等 一、〇〇
椅子		三等 〇、五〇

昭和八年四月三十一日印刷
昭和八年五月一日發行
大阪・四ツ橋・文樂座
編輯兼發行人 大塚良三
編輯 成山桂三
印刷者 永井太三郎
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目

レート白粉